

■長崎県公立高校 2026年度入試 結果総評

—長崎県—

令和7年度入試より、「前期・後期入学者選抜」から「特別選抜・一般選抜・チャレンジ選抜」に変更されました。2026年度の公立高校の一般選抜の志願倍率については、例年激戦である長崎西理系コースの倍率が2.2倍と、依然として高倍率となっています。志願者が分散され、「長崎五校」全体の倍率は昨年並み、もしくは微減となりました。

県平均を見てみると、社会が50%台前半、国語・理科・数学も55%前後と、低い得点率となっています。また、入試制度の変更により、英語と数学の検査問題は、各高校がA問題とB問題から指定することとなっており、長崎五校はすべて、難易度がやや高い、B問題を選択しています。公立入試の問題レベルは適切であるため、早い段階から実践的な問題を解けるようにするために、しっかりとした準備期間が必要です。

【令和8年度公立高校入試 実施状況(長崎五校)】

学校名	学科名	全定員	特別等 合格者数	一般 受験者数	一般 合格者数	一般選抜 受験倍率	
						今年度	昨年度
長崎東	普通・国際	280	129	158	151	1.05	↓ 1.14
長崎西	普通	200	38	122	162	0.75	↑ 0.65
	普通(理系)	80	4	167	76	2.20	→ 2.2
	計	280	42	272	238	1.14	→ 1.14
長崎南	普通	240	36	172	172	1.0	→ 1.0
長崎北	普通	240	36	238	204	1.17	↑ 1.07
長崎北陽台	普通	200	30	170	170	1.0	↑ 0.86
	文理探究	80	3	91	77	1.18	↓ 1.45
	計	280	33	261	247	1.06	↑ 1.04

【令和7・8年度 県全体の平均点及び英進館受験者の自己採点での平均得点の比較】

※傾斜なし500点満点、小数点以下は四捨五入にて計算

年度	県／英進館	国語	英語	理科	社会	数学
令和7年度	県全体	64.3	A問題 44.1 B問題 62.7	51.0	58.6	A問題 42.4 B問題 50.9
令和7年度	英進館	80.7	B問題 77.9	75.1	80.0	B問題 64.4
令和8年度	県全体	54.4	A問題 46.3 B問題 61.3	53.7	51.3	A問題 43.7 B問題 56.1
令和8年度	英進館	73.5	B問題 78.2	78.3	76.8	B問題 69.7

長崎県教育委員会から公表されている小問ごとの配点と英進館が推測した採点基準をもとに、自己採点をしてもらいました。英進館生(当日来た方のみ)の集計で作成しております。あくまでも目安としてご覧ください。

※県全体の平均点は、長崎県教育委員会の成績資料より引用しています。また、英進館の受験者のうち、英語と数学のA問題での試験実施者が少ないため、英進館の自己採点基準での平均点は、B問題のみ記載しています。

◆出題傾向

〔国語〕 県平均【54.4 点】

大問四題構成である。現代文二題（説明的文章・文学的文章）、古文一題、会話文と複数の資料をもとに答える問題が一題、出題された。記述の配点が本年は全体の38%だった。記述の文字数は、現代文が約15～70字、古文は20字、会話文と複数の資料をもとに答える問題は約100字だった。現代文の記述の文字数がやや多いため、内容を整理しながら、重要なポイントを抑えて読むように心掛ける必要がある。

〔英語B問題〕県平均【61.3 点】

大問1リスニング、大問2対話文、大問3資料の読み取り、大問4長文問題の4題構成。リスニングは昨年からの記述問題が出題されている。リスニングの記述問題は日本語の空欄穴埋めのため、練習を行えばしっかり点数がとれる。記述問題が配点の40%前後を占めており、特に英作文に関しては早めの対策が望ましい。昨年度より、英作文は20語以上、記述するための条件も2つあるため、同形式の英作文を何度も練習する必要がある。

〔理科〕県平均【53.7点】

昨年度から大問7題構成。これまでは、生物・物理・化学・地学の分野ごとに大問2題ずつ出題されていたが、昨年度は新傾向の問題として、「防災」をテーマとした地学・物理の分野横断型の問題が20点分、今年度は、化学分野と物理分野の融合問題が出題された。全体的な構成は、各分野25点ずつで、例年と比べても変わらない。全41問のうち、記述問題が6題が出題され、うち1題は、探究型の問題が出題された※。作図問題は2題で、平易な問題であった。基本的な知識から、記述で聞かれていることに正確に答える力まで、幅広い力が必要とされる。

※地震によって起こる現象をあげ、その現象による被害を最小限にくい止める方法を問う問題

〔社会〕県平均【51.3点】

昨年度から、大問数が1題減り、5題で構成されている。歴史1題、地理2題、公民1題、融合問題1題で出題された。基本的な語句を書く問題が全体の30%ほどを占めている。記述の配点は、昨年度までは全体の28%前後であったが、今年度は38%と増加している。基本を徹底的に行い、時間配分に気をつけて解くことが重要である。記述量が増えているため、語句事項を自分の言葉で説明できる力が必要で、早期の準備が大切である。

〔数学B問題〕県平均【56.1点】

昨年度から、大問数が例年の6題から1題減って5題となっている。大問1は小問集合、大問2は資料の活用や確率、文字式の証明問題、大問3は関数、大問4は立体図形、大問5が思考力を問う問題となっている。昨年は大問4で平面図形が出題されており、大問4では平面・空間図形のどちらかが出題されと考えられる。配点の比率は大問1が30%を占めており、大問2～5がそれぞれ15%～20%前後。大問5は文章量と資料数が多く、読解力を必要とする問題であった。基本的な出題である大問1～4を取りこぼさないことと、時間がかかる大問5を解くための時間を残すために、素早く問題を解くスピードも重要であった。